

「自分を無にして」井上隆晶牧師

フィリピ 2 章 6～11 節、ヨハネによる福音書 13 章 12～17 節

①【フィリピ教会の成り立ち】

この手紙は紀元 61～63 年頃、ローマの獄中で書かれたものだと言われています。フィリピはギリシャの町であり、ユダヤ教の会堂はなく、ユダヤ教徒たちはアンゲテス川のほとりに祈り場をつくって、そこで礼拝していました。紀元 52 年にパウロはこの川岸で伝道し、紫布を扱う女商人リディアと家族が信者になります。

（使徒 16：13～15）また占いの霊にとりつかれた女奴隷を癒したことから町の住民と衝突が起こり、パウロは投獄されますが、それによって看守一家が洗礼を受けて信者になります。（使徒 16：31～34）このリディア一家と看守一家が最初の教会員であり、そこに何人かが加わってこの教会ができたようです。彼らはしばしばパウロの伝道のために贈り物をして助けました。この手紙の特徴は、獄中で書かれているにもかかわらず「喜び」という言葉が 16 回も用いられていることから「喜びの書簡」と言われています。パウロが教会に手紙を出すのは、信仰を励まし、教会の何かの問題に対して指導するためでした。エフェソ教会の問題は、教会内の不一致でした。3～4 節に「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。」とあります。フランシスコ会訳では「対抗意識を持ったり、みえを張ったりせず、へりくだって互いに相手を、自分より優れたものと思いなさい」となっています。分かりやすいですね。このためにキリストを模範として倣うようにと賛歌を書きました。

②【キリスト賛歌】

この 6 節から 11 節の「キリスト賛歌」はパウロの作ではなく、すでに教会の典礼で使われていた賛歌（トロパリオン）であるといわれています。三位一体はまだ形成されていませんが、60 年代にはすでに教会はキリストを神として賛美していたのが分かります。

6～8 節「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」正教会訳は「彼は神の像（かたち）にして、神と等しくなることを超えようと（犯そうと）せざりき。しかれども己を虚しくして僕の貌（かたち）を受け、人と同じ者となりて、外形において人の如くなり、己を卑くして死に至るまで順い、かつ十字架の死に至れり」です。バルバロ訳では「キリストは本性として神であったが、神と等しいことを固持しようとはせず、かえって奴隷の姿をとり、人間に似た者となって、自分

自身を無とされた。その外貌は人間のように見え、…」です。大体の雰囲気は伝わってきます。キリストは本性としては神であったが、神の身分にこだわらず奴隷となり、人間と同じ者となられ、自分を無にされました。その姿はまさしく人間であったということです。なぜキリストはこのように自分を「無」にされたのでしょうか。無とは自分というものが無いということです。すべてを他者に与えてしまうということです。それはひと言で云うなら「愛」です。愛とは自分を与えることだからです。イエス様は優しい言葉を与え、空腹の者に食べ物を与え、病いの癒しを与え、罪の赦しを与え、自分の時間を与え、教えを与え、最後は自分の命を与えられました。イエス様がいかに自分を奴隷のようになさったかは弟子たちの足を洗ったことをみても分かると思います。弟子の前に身を屈め、汚れた足を取り、自らの手で洗われました。それは神に生きる本当の人間の姿、隣人を愛するとはどういうことかを身をもって教えるためであったと思います。

③【キリストは「主」という名前を与えられた】

「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上の者、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」(9～11 節)「あらゆる名にまさる名」とは「主」という称号です。ギリシャ語では「キュリロス」といいます。旧約聖書で神様だけに用いられた「ヤハウェ」というヘブライ語がありますが、旧約聖書をギリシャ語に翻訳した際に、「ヤハウェ」を「キュリロス」と訳しました。キリストはヤハウェ神ですという告白です。この賛歌の最後に歌われる「イエス・キリストは主である」という言葉は初代教会の信仰告白でした。

・「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです。」(使徒 2 : 36)

・「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活せられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」(ローマ 10 : 9)

私たちは簡単にイエス様を「主よ、主よ」と呼んでいます、これは大変な告白なのです。キリストを「主」と呼ぶということは、他の者を「主」としないということです。もちろん自分自身をも「主」としないということです。自分の人生の主人は、自分ではなくキリストだということです。キリストが私の人生で何をされても、何を奪っても文句を言わないということです。思いがけないことを要求されても、突然、キリストの用事が入ってきても従うということです。それがキリストを「主」とするということです。

この世は神を「主」としないで、人間が「主」になっています。人間がこの世を支配し、この世のすべて、自然も、鉱物も、動植物も、海洋資源も自分の物にしようとし、神を認めず、神に従おうとしません。そして神の思いではなく、自分

の思い、自分の願いがなることを願い、神をそのための奴隷のように扱っています。ある一人のキリスト教徒の方を紹介します。

●岩永マキ(1848～1920)

明治から大正初期。浦上の一人の女性が 72 年の人生を、名もなく、貧しく、他人への奉仕に身を捧げ尽くして亡くなりました。岩永マキといいます。マキの苦しみは、明治 2 年 22 歳のとき「浦上四番崩れ」というキリシタン弾圧の旅（流刑）に出るところから始まります。明治 6 年荒廃した浦上に帰ったマキは、茶碗のかけらで土を掘って野菜の種を蒔き、自給自足の生活を始めます。翌年、伝染病（赤痢・天然痘）や天災が浦上をおそい、マキたちの捨て身の救援活動が開始されました。これに大浦天主堂にいたド・ロ神父、さらに後を継いだボアリエ神父の指導が加わって、明治 10 年に「十字会」という準修道会が設立されました。疫病救済から始まった奉仕活動は、孤児養育という新たな使命に向かいます。貧困のあまり養育を放棄された子供、私生児、障害を抱えた子供など、素性も境遇も異なる子供たちすべてを受け入れました。養子縁組をして自分の籍に入れ、捨て子には岩永姓で戸籍を作ったので、その数は 1800～1900 名に上りました。名前すら付けられないまま捨てられた子供たちのため、死んでゆく小さな命に名前を与え、戸籍を作り、洗礼を受けることで、生きた証しを残しました。その施設は県下各地に及びました。このようなマキさんの事業が、後の社会福祉の礎を築きます。マキさんは大正 9 年（1920 年）1 月 27 日に亡くなります。マキの枕もとには、ボロボロの着物が一枚しかありませんでした。彼女が自分で織った木綿の着物で、これが唯一の遺品でした。浦上天主堂から墓までの 2 キロの道は、マキさんが育てた子供たちや参列者で埋まったといいます。

昔はすごいクリスチャンがいたのだなあと思います。マキさんの生涯は、まさに自分を無にして、自分のすべてを与えて生きた生き方だと思います。それはキリストに似た生涯だったと思います。

ジェラルド・シャンドリは「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなく、われわれが与えたものである」と言っています。三浦綾子さんも小説『続 氷点』の中に、この言葉を引用しています。聖書にも「受けるよりは与える方が幸いである」（使徒 20：35）と書かれています。

私たちは周りの人に与えてきたでしょうか。赦しを与えましたか？助けを与えましたか？自分自身を与えたでしょうか？与えたものだけが最後に残るのです。キリストのように自分を無にして与える人生を目指したいと思います。